

〈講演〉

# 歴史に見る 発展のための経済知の意義（Ⅰ）

## The Significance of Economic Knowledge for Development in History (I)

ベルトラム・シェフォールト  
原田哲史・若松直幸 訳

A strange gap exists in economic science, between sound economic theory and average economic knowledge in the population. Five reasons why economic knowledge is neglected as a factor of growth in the economic science and how it may nonetheless be used for explanation, are: 1. rules of action, 2. technical knowledge and abilities, 3. theory of economic growth, 4. implicit knowledge and 5. the role of the history of economic thought. The concept of the Social Market Economy is aimed at economic order and development based on consensus.

Bertram Schefold

JEL : B10, B20, B30

キーワード：経済学史、経済思想史、経済知、社会的市場経済、経済学史研究会

Keywords : history of economic thought, economic knowledge, Social Market Economy, kgshet

---

2019年12月7日（土）本学図書館ホールで開催された経済学史研究会第250回記念例会における2つの記念報告のうちのひとつ、ドイツ・フランクフルト大学（ゲーテ大学）経済学部上級教授ベルトラム・シェフォールト（Bertram Schefold）氏による“The Significance of Economic Knowledge for Development in History”の邦訳である。当日配布した邦訳を、その後の氏との討論を経て加筆修正している。英語のそれはドイツ語の小冊子 *Die Bedeutung des ökonomischen Wissens für Wohlfahrt und wirtschaftliches Wachstum in der Geschichte* (= *Sitzungsberichte der wissenschaftlichen Gesellschaft an der Jo-*

## 1. 経済知のパラドックス

素人でも経済学に敬意を表する人なら、確かな経済理論にもとづく経済政策は経済現象の良好な機能のために、経済成長のために役に立つものだ、と信ずるはずである。とはいえ、その経済学それ自体に、奇妙な分裂が存在するのである。経済学者たちが経済政策主体として語る場合、彼らは、競争に関する規制の法制化、減税による民間需要の拡大など、所与の目的の達成のための的確な手段を採用するよう、政府や行政にためらわずに政策提言する。素人もまた、ある程度は、そのような知識は政治家や市民が持っている常識であり、この知識が経済学の間接的応用として成長と福祉の促進に役立つと考えるだろう。しかし、様々な国民経済の成長と発展を長期的に考えると、普通の人々の平均的な経済知 economic knowledge<sup>1)</sup> は経済的成功を説明する変数としての役割を果たさないし、言及すべきほどの経済学的なレベルには達していない、とされる。経済についての政府の権能でさえ、言及されることが稀なのである。

それとは対照的に、通常、技術知 technical knowledge が多くを説明することは強調される。20 世紀における米国の経済成長の成功は、並みはずれた技術開発の傾向というものにいと簡単に帰される。経済知の存在がこの成功を説明するのにあまり役立っていないのは確かであろうが、それは一般に教科書

---

*hann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main*, Bd. LV, Nr. 2), Franz Steiner Verlag, Stuttgart 2018 を短縮し英訳したもので、加筆修正にあたってはよりオリジナルなドイツ語版を参考にし、箇所によってはそれにもとづいて意識した。掲載は 2 分割し、今回はその (1) である。読者の便宜のため、末尾の文献一覧はここでもすべて掲載した。本文中の [ ] は訳者による補足 (文献の出版年の場合のみ原著者による)、脚注はすべて訳者による注釈である。

上記の記念例会については、本誌第 74 巻第 1 号所収の原田哲史「経済学史研究会の第 250 回記念例会とその歩みについて」を参照。もうひとつの記念報告は、竹本洋氏による「テキストと読解——「歴史器官」としての経済学史・社会思想史」であった。なお、記念例会へのシェフォルト氏の招待にあたって、関西学院大学から国際共同研究交通費補助を受けた。記してお礼申し上げたい。——以上、訳者

- 1) 頻出する“economic knowledge”(ドイツ語版で“ökonomisches Wissen”)の訳語としては他に「経済的知識」「経済的学識」といった可能性もあるが、ここではむしろ、高度な学識も含むとしても、充分には理論化されていない経営体・行政などでの実践的・経験的な経済把握にアクセントを置いて使われているので、広い意味を有しかつ簡潔な表現として——ドイツ語の“Wissen”は通常「知識」と訳されるとはいえ——「経済知」を選んだ。

では完全に無視されているのである。さらに、産業革命と近代的な経済発展の全体的加速が西ヨーロッパで始まったけれども（Mokyr 2017）、なぜローマ帝国の後期、あるいはより近代の中国、インドないし日本においては、18世紀初頭の西欧に匹敵する経済統合水準と生活水準とに達していたにもかかわらず、始まらなかったのか、という今日知られた問題を扱う場合に、経済史がこの説明変数〔経済知の状況〕を使わないのはどうしてだろうか（Goldstone 2000）。

私は〔第2節で〕、経済学の生成・発展の要因として経済知が無視される傾向にあること、〔であるがゆえに経済思想史が重要であること〕、これらについての5つの事由を述べたい。そのあと〔第3節で〕オールド自由主義をその重要な例外として扱い、それがどのようなドイツの伝統に根ざしていたかを示す。最後に〔第4節・第5節で〕経済思想史研究者の立場から、経済発展の過程において、経済知がどのようにしてある段階で不可欠なものとなったかを示す重要な事例について論じる。そこではEUのような現在の例から始め、続いて歴史にさかのぼるのであるが、それは中世での倫理的な思考にまで至ることになる。中世の倫理的な思考は、現代の分析とは異なる形態をもっていたが、それでもなお経済学の生成・発展にとって重要であった。このように歴史にさかのぼるのは、経済知の状況と経済発展の特性との関係が噛み合ったものとして叙述しうるからであり、様々な時代を詳細に提示するのは、経済的な思考を叙述する材料がそれによって豊かになるからである。16世紀以前から多くの学問分野が始まっているとはいえ、経済学はそうした古い諸学問に属すわけではない。しかしながら、このことは、過去の経済主体たちが自らの行いを知ることなしに彼らの経済制度を生み出したことを意味するわけではないのである。この議論が説得力をもつことが分かるために、われわれは時代をさかのぼることにしよう。

今日、ケインズやフリードマンのような経済学者については、その学説が過去数十年の発展に影響を与えたことが認められている。しかし、それ以前にも、経済の活動は経済の思考に依存していたのであり、その時代の観念によって関

係づけられていた諸制度によって——私が経済スタイル economic style<sup>2)</sup> と呼ぶものが見られるように——条件づけられていた。ヴェルナー・ブルンベ<sup>3)</sup> は次のように述べている。「自分の研究領域の妥当性に対して慎重に向き合う経済学者でなければ...、これらの関係がなぜ過去数世紀には妥当しないのか理解することができない。したがって、経済の歴史叙述は、つねに様々な意味づけ・制度・方法が共に進化してきたことに注意を払わなければならない、このようにして初めて、今日なおグローバルな経済の現実を形成しているそれぞれの異なる経済スタイルがそのようなものであることが分かるのである」(Plumpe 2009, p. 51)。

## 2. なぜ経済史と言いながら経済知を無視するのか、とはいえなぜ経済知は説明に使うことができるのか、についての 5 つの事由

### 2.1 行為規制

現代経済学の主流を成すいわゆる新古典派は、おもに近代自由主義に根ざしている理論であるが、その核には一般均衡モデルをもつ (Debreu 1959, Arrow and Hahn 1971)。複数の経済主体は、財やサービスの価格と、いわゆる生産要素の費用とに応じて自らの行為を方向づける。経済主体たちは、システム全体に関する経済知を少しも必要としないと述べるだけで充分である。消費者は消費の様々な利益と商品購入に関するそれぞれの費用を知っていれば充分であり、企業は生産と製品の販売を組織化する方法を知っていれば充分である。雇用を増やし (失業は自発的失業のみ生じる)、分配に影響を与え、あるいは供給を確保するために、他の経済制度を創設する必要はない。経済システムはいつも同じであり、そこには歴史はないのである。

2) シェフォールドは、W. ゾンバルト (1863~1941 年) と A. シュビートホフ (1873~1957 年) による経済体制把握の方法にしたがって過去および現在のそれを説明することを提唱している (Cf. Schefold 2014; Schefold 2015)。その要点は、精神・組織・技術という 3 層構造ないしそのヴァリエーションとして各々の経済体制を捉えることである。それを「経済スタイル」つまりドイツ語の “Wirtschaftsstil” と呼ぶのはシュビートホフの用語法であり、英語で “economic style” とされている。原田哲史「歴史学派の遺産とその継承——ザリーンとシュビートホフの「直観的理論」」、『思想』No. 921、2001 年 2 月、参照。

3) フランクフルト大学の経済・社会史の教授。ルートヴィヒ・エアハルト経済評論賞の受賞者。

奇妙なことに、経済社会学の最も重要な著者であるマックス・ヴェーバーも、アプローチが非常に歴史的であるにもかかわらず、経済知の状態に注意を払っていない。彼によれば、変化するのは行為の傾向・規則であって、それらが、特定の社会の特定の時代における経済行為を支配的な倫理に照らして拘束している、ということになる。彼は、利潤・効用の最大化が近代合理性の表明であると解釈するのであるが、この近代合理性の場合、特有の倫理規則を職業・家計にあてがっていることになる。ヴェーバーは近代資本主義をそれ以前の状態と対比しており、以前の段階では家計維持と会社経営が一致していたため、家計内において、家族的紐帯に従うがゆえに、一方で利潤極大化・効率性と他方での効用極大化との間で衝突が生じる余地があったということになる。家長は——現代の企業が無能な者を解雇するのと同じように——彼の若い方の息子を怠惰ゆえ家から追い出さなければならないだろうが、家族的紐帯が彼にそうした効率性の実践をやめさせるのである（Scheffold 2011）。マックス・ヴェーバーは、そうした類の宗教的信念と結びついた倫理システムの蔓延を、中国のような非ヨーロッパ文化において自律的な資本主義の発展を妨げる本質的障害と見なした。世界宗教の経済倫理に関する彼の徹底的かつ壮大な研究は、西ヨーロッパのピューリタニズムが近代合理性への移行の道を開いた一方で中国の場合のように非ヨーロッパ諸文化は特異な合理性に根ざした伝統ゆえ近代資本主義への道を見い出せなかったことを証明しようとする試みであって、その主張はわれわれに圧倒的な印象を与え続けてきた。経済知の状態および経済過程の論理の理解はしかし——新古典派思想と同様——彼が世界文化の多様性を説明する際には問題にされなかったのである。

## 2.2 技術知・技術力

歴史学派経済学の誰かに、マルクスに、マックス・ヴェーバーに、あるいは現代の経済史家に、西ヨーロッパで産業革命を可能にした特有の発展の原因について尋ねるならば、離陸のための明白かつ必要な前提条件として、科学的・技術的な知識の状態について、つねに言及することになるだろう。この技術知の進化は格別の論理をもっていた。産業革命それ自体の一連の出来事はよく知

られている。イギリスでは人口増加と木材不足、エネルギー源としての石炭利用への移行、鉱山を深く掘り下げて水をくみ出す必要性、そしてこの目的のための蒸気機関の発明があった。これらは、初め非常に単純であったが、すぐにポンプや織機を運転するだけでなく、鉄道敷設のために道床を作るまでに発展した (Sieferle 1982)。この技術知には二重の特徴があった。一方では、初期のエンジンを作るために職人の知識が必要であった。手工業はギルドの伝統から離れて、記述による伝達の可能な新技術を開発する必要があった。以前は、若い職人が師匠の説明を受けながら見よう見まねで学んでいた。職人の技能がギルドの秘密と結びついていたので、ギルドの独占的地位は可能となっていた。フランス革命以前の啓蒙哲学者たちとくにデイドロとダランベールが偉大な『百科全書』の出版でもって職人たちの内在知 *implicit knowledge* を開示しようとした結果、それが先進的な技術構造へと利用可能になったことは知られている (Poni 2009)。他方で、分析的な発展は必要だったのであり、それは学術的な方法にもとづいて、抽象知 *abstract knowledge* の発展を目指すものであった。職人技と物理学が結合して近代工学へと合流していかなければならなかった。物理学の第一領域たる力学へのガリレイのアプローチは、この二重の特徴を示している。

18 世紀末の産業革命の前提条件についての探究は中世後期にまでさかのぼることになるのであり、思索的で応用指向的な科学が後期スコラ哲学と初期人文主義からどのように発展することができたのか、という問題へと行き着くのである。この進化それ自体を探究することはわれわれの仕事ではないけれども、この点に関しては、経済発展の前提条件としての知 [技術知] はそれだけでは経済知の必要性を問う問題へとつながるわけではないことを、指摘しておきたい。研究の世界には、可視のテクノロジーの意義ばかりに目を向けて経済的な知識を見過ごしてしまう人がいるものである。

### 2.3 経済成長理論

現代の経済成長論は、経済学史的には資本蓄積と技術進歩を説明した古典派経済学にさかのぼることができる (Schefold 2017)。新古典派は生産諸要素

の需要と供給という点で分配の説明に転じたが、資本蓄積でもって生産力上昇を説明することに変わりにはなかった。さて、そこに知識経済の問題が生ずるのである（Caspari and Schefold 2011）。それは、公の議論に供しうる開示知 explicit knowledge と、経験から生じて大っぴらには話し合わない内在知 implicit knowledge<sup>4)</sup> とを区別する。知識がもつ特徴のひとつは、私的所有物にはなりえないので売ることもできず——といっても知られなければ提供されえず——自由なコミュニケーションにおいて拡散していく、ということである。ただし、経験にもとづく知識というものは個人に結びついた状態でありつづける。一般に使用可能な知識を増加させるなら公共の利益となるが、私的に保有されて個人の利益のために利用される知識は、蓄積されても、個人が好きになようにできる。

しかし、経済知の存在を経済成長に関連づけかつ他の科学知・技術知から区別しようとした人は、ほとんどいないのではなかろうか。これもまた、経済成長のモデルが前提とするのは、経済主体たちが価格シグナルに忠実に従う透明な競争経済という——一般均衡理論でそうなっている——仮定があるからであろう。総じて、経済全体が「見えざる手」に導かれるなかで、個々人には特別に扱うことのできる経済知というものが前提される必要はない、ということになる。ただひとつの制度だけは、新しい経済成長理論があるなら、その特徴となるであろう。それは、発明・考案が特許取得となるような制度であって、それがあれば、特許を取引すること自体が刷新者たちを仕事へと動機づけることになるのである。

## 2.4 内在知

たとえわれわれが経済発展のための経済知の重要性を力説するとしても、それが普及する過程をたどるのは容易ではない。理論家は、多くの知識が内在的な形態でしか存在しないことを認識しなければならない。にもかかわらず、それは尊重されなければならない。私の〔経済学という〕専門分野における全ての仲間たちは、ビジネスマンや起業家と会話し、彼らと経済の見通しについ

4) 内々では言われているが、公に明文化された知識や学説にはなっていない認識や理解。

て議論して、彼らの内在知には、経済学者の抽象的モデルと比較すれば、現状を評価するための利点が含まれていることを認識するにちがいない。起業家は自らの直感を信じ、自信をもって自分の予測を表明する。内在知は組織内においても重要である。一例として、理論的な考察にもとづき、その目的と手段を明確にしたうえで、金融政策を説明するために月例報告を公表しているドイツの中央銀行（ドイツ連邦銀行）を挙げよう。ドイツ連邦銀行はかつてマネタリズムに従っていた。それによると、インフレを予防するための主要な手段はマネーサプライのコントロールということになる。今日ではこの中央銀行は、マネーサプライの形成は内生的に決定されるのであり（Bundesbank 2017）、金融政策は中央銀行の固定的貸出金利にもとづくことを認めているようである（Reich 2017）。このように、ドイツ連邦銀行の古い内在知が開示されて、古い開示知は修正されていることが分かるのである。

とはいうものの、多くの内在知は、同様に、理論家によって最初に定式化された基本的な経済諸原理にもとづいて決定されるものである。ケインズは、少なくとも次のように断言した、「自分はどんな知的影響からもまったく免れていると信じている実務家肌の人たちであっても、たいていは、ある死んだ経済学者の奴隷なのである」（Keynes 1967 [1936], p.383, 邦訳 386 頁）。アダム・スミスがリベラルな経済政策の歴史に与えた影響や、マルクス（1969 [1867]）が社会民主主義的な扇動運動に残したインスピレーションなどがその例だろう。したがって、理論はまたこのようにして、純粋な形式においてではなく主観的な経験と結びついて実践に影響を与え、内在知は開示化された学説と並行して現れる。この内在知は様々な経済現象を深く理解するのに役立つ、いったんその諸関係が直感的に、しかも具体的な科学的概念の形成に先立って理解されると、それらは続いて開示化された諸理論の定式化を可能にする。経済学の用語が現れてくる重要な時代として重商主義または——中央ヨーロッパでは——官房学を挙げることができるのであるが、[それ以前の] 中世の諸時代はあいまいな時期であって、そこでは経済的諸関係はしばしば明確には表されなかった（少なくとも形をなしてわれわれに伝えられたものはない）。さらにあとで、経済的認識を得るための大きな専門的な探究の時代が到来することにな



る。その様々な用語がどのようにより洗練されていったのか、とりわけ、われわれは課税に関して見ることができる。すなわち、どのような種類の所得が経済に有益な方法でかつ公平に課税されるのか、どのような国家支出が正当で妥当であるか、など（Klock 2009 [1651]）。ヴォルフ＝ハーゲン・クラウト（1984）は、16世紀と17世紀にドイツ語圏で経済構造と意味づけとがどのように並行して発展してきたかについて述べている（Seppel and Tribe 2017も参照）。ゲーテの著作と人生は今なおこの連続性を示し続けている（Schefold 2016d）。もちろん、今日でも意味づけ・制度・理論は相互に関連して進化し続けている。しかしながら、現代経済学においては、そのようにして質的に何がなされたかについて正しく評価することは、ほとんどないのである。

合理的期待に関する文献を読めば、経済政策の立案者と国民とが同じレベルの知識をもつという仮定をわれわれに教えてきたことが分かるけれども、それではなぜ、主要な自動車製造会社の取締役会の人々は、欧州中央銀行の取締役会の人士たちよりも経済について知らないのだろうか。合理的期待の議論からすれば、経済史家たちと過去の経済発展の立役者たちとの間でも同じレベルの経済知があることをわれわれは仮定するだろう。しかしこうした類推というものは困ったものである。そんなことをすることに経済学の理論化の進展があるとすれば、それは本当に許されることなのだろうか、と私は問いたい。自らの科学に誇りをもっている現代の経済学者は先行者たちの知を低く評価したくてたまらないのだが、ただ単にそれを——表現の用語・仕方が変わったため——理解していないだけではないかと思う。過去における開示・内在の両経済知を収集・整理しかつそれを現代の経済知と関連づけること、これこそまさに経済思想史が実証的に行う仕事なのである。

## 2.5 経済思想史の役割

経済に関する古めの思考が経済成長の決定要因として見なされるのは稀であることは、そうした思考が主として内在知であるから、また実際あるいは一見すれば時代遅れの知であるから、といった理由でもって説明されたりする。それもあって、そうした思考が具体的な諸状況でどのように機能しているかを

確認することは難しい。とはいえ、様々な国を比較することならできよう。その比較において、経済知に関する複数の指標が測られ、そうした指標が経済成長の成果へと関連づけられるのである。ただし、人的資本の場合でさえ、人的資本のレベルの高さが経済成長を促進するという推測しうる命題をしっかりと確かめるのは難しい。知識というものは、就学年数という量だけで測られるものではなく、むしろ本質的には、質の側面に依存しており、この質こそ数多くの次元において把握される必要があるにもかかわらず、知識が修学年数というひとつの指標によって表されねばならないことになってしまうからである。この方向よりもむしろ、私がとりたいのは、自分のテーゼを異文化間の比較でもって裏付ける方向であり、ヨーロッパの発展の様々な局面と他の諸文化との対比とをそのために援用したいのである。われわれは、ケインズが言うほど、内在知はとどのつまり開示された古い諸理論にもとづいていると確信してはいないけれども、経済思想史を通じて内在知をより良く理解すべく探究するものである。内在知が姿を現すのは、なぜある価格が不当かとか、どのような雇用政策が成功するかとか、を言うことによって、人が自らを正当化する必要があるときである。[逆に] 説明を拒む方が合理的な場合とは、職人の秘密のように知識の内部留保によって利益がもたらされたり、詳細な知識の説明ができなと感じたり、あるいは高利貸に関する議論のように詳細な説明が既存の秩序に傷を付けたりする場合である。

今やわれわれが複数の例でもって試みようとするのは、経済思想と経済知が既存の権力・支配の関係を正当化するためにのみ考案されてきたのではなく、新たな経済の現実を生み出すのに貢献してきたことである。このことはとくにドイツで強調されてきたのであって、まさにそのためにドイツ歴史学派について語る事ができるであろう。

### 3. 社会的市場経済——コンセンサスにもとづく経済秩序と発展

ドイツ歴史学派の経済学者たちは古典派と新古典派の理論の使用を控えてきた。しかし彼らが完全に反理論的であると言うのは正しくないであろう (Schefold 2014, 2015, 2016c)。歴史学派のすべての論者は、経済発展を複合的な総体と

して把握することが重要だと考えていたのであり、その総体においては、経済が量的な変化を成し遂げていくときに、技術の進歩、資本の蓄積、教育——経済知を含むそれ——の振興、道徳の向上が、文化と手を携えて変容していくものなのである。経済学者はその過程を理解すべきであるのみならず、新しい諸制度の確立によってそれを支援すべきである、とされた。このようなものとしてシュモラーの社会政策もあるのであって、ドイツの大学の諸課程においても、コンサルタントや専門家としてのエコノミストたちの実践においても、ドイツ的な公財政・財政学は共通の必要に配慮するし、法と経済は親密な関係にあるのである。

理論との統合はオールド自由主義によってもたらされた。オイケンはその主な代表者（Eucken 1940）であり、理論に対する歴史学派の敵意を批判したが、彼は適切な制度を生み出す作業を慎重に行った。彼は第二次世界大戦前に、一般均衡理論と貨幣理論の手法を使っていたし、不完全競争を表現する当時流行した新たなモデルをそれに加えてもいた。こうした理論的拡張を行っていたので、オイケンは、配分をめぐる複数の形態の相違を区別すること（完全・不完全競争市場、計画経済、なかでも経済総体の計画化か、産業部門のみの計画化として消費財の分配は当てはめないのか、など）ができたのであって、それは体系的に異なった様々な経済の理念型を推定するのに役立つのであるが、そうした彼の試みは、配分と中央制度——貨幣制度（金に裏付けられた貨幣、法定不換紙幣その他）など——との諸原理の結合に関する仮説にもとづいていたのである。

よく知られているように、社会的市場経済の理論は、経済秩序を確立するための政策と、経済過程に影響を与えるための政策とを区別している。経済秩序は、市場を機能させる制度とくに不完全競争の規制に関係している。完全競争が理想と見なされるが、例えば、企業が少なくとも技術的な理由のため一定の規模に達している必要があることからして、幾つかの制限が認められる。また、特定の部門で十分な完全競争が達成できていない場合でも、代替を通じた競争による市場支配力の制限が期待できる（Eucken 1952）。それとは対照的に、経済過程に影響を及ぼす政策は、経済的な生産・消費過程への介入に関係

する。とくに、ケインズ主義的な景気刺激策はそのような観点から見られた。社会的市場経済の理論家たちは、経済秩序の維持が危機の回避に役立つと信じていた。そうすれば、過程に影響を与える政策をほとんど控えることができるのである。不況はとりわけ好況期の経済の過熱によって引き起こされるが、好況はそうでない適度に規制された状況で生成するので、もし国家の経済政策があまりにも手ぬるければ不況が発生すると考えられていたのである。

このように理論的に構想された総体において、経済政策は主にオールド自由主義的な規制の枠組みによって事前に決められていた。これに対応する経済知は、エリートのメンバーにだけでなく——その主要な特性として——民主主義社会で共有されるものと考えられていた。経済相エアハルトの國務長官であったミュラー＝アルマックによれば、社会的市場経済は、被雇用者側では効率性の原則にもとづかなければならないと同時に、健康や加齢などの理由により市場で生計を立てられない人々にとっては再分配にもとづいてもいなければならないのであった。

[II に続く]

#### 参考文献

- Aquinas, Thomas: *Sancti Thomae Aquinatis Ordinis Praedicatorum Summa Theologiae III, Secunda secundae*, cura fratrum eiusdem Ordinis. Madrid: Biblioteca de autores cristianos 1968. 稲垣良典他訳『神学大全』第 3 部、創文社、1997-2012 年。
- Arrow, Kenneth; Hahn Frank H.: *General Competitive Analysis*. San Francisco: Holden-Day 1971. 福岡正夫・川又邦雄訳『一般均衡分析』岩波書店、1976 年。
- Azpilcueta, Martin de: *Comentario Resolutorio de Cambios*, 1556, Reprint in Verbindung mit Luis Ortiz: Memorial del Contador Luis Ortiz a Felipe II, 1558, *Klassiker der Nationalökonomie*, mit einem Kommentarband hrsg. v. Bertram Schefold. Düsseldorf: Wirtschaft und Finanzen 1998.
- Bagehot, Walter: *Lombard Street*. Düsseldorf: Wirtschaft und Finanzen 1996 [1873]. *Klassiker der Nationalökonomie*. 久保恵美子訳『ロンバード街——金融市場の解説』日経 BP クラシックス、2011 年。

- Bernstein, Peter L.: *Against the Gods. The Remarkable Story of Risk*. New York: Wiley 1996. 青山護訳『リスク——神々への反逆』日本経済新聞出版、1998年。
- Deutsche Bundesbank: Monatsbericht: Die Rolle von Bank, Nichtbanken und Zentralbank im Geldschöpfungsprozess. *Monatsbericht*, April 2017, 69. Jg. Nr. 4, 15-36.
- Caspari, Volker; Schefold, Bertram: *Wohin steuert die ökonomische Wissenschaft?* Frankfurt: Campus 2011.
- Debreu, Gérard: *Theory of Value*. New York: Wiley 1959. 丸山徹訳『価値の理論——経済均衡の公理的分析』東洋経済新報社、1977年。
- Eucken, Walter: *Die Grundlagen der Nationalökonomie*. Jena: Gustav Fischer 1940. 大泉行雄訳『国民経済学の基礎』勁草書房、1958年。
- Eucken, Walter: *Grundsätze der Wirtschaftspolitik*. Bern: Francke 1952. 大野忠男訳『経済政策原理』勁草書房、1967年。
- Goetzmann, William N.: *Money Changes Everything. How Finance Made Civilization Possible*. Princeton: University Press 2017.
- Goldstone, Jack A.: The Rise of the West - or Not? A Revision to Socio-economic History. In: *Sociological Theory*, 18, pp. 175-194, 2000.
- Gordon, Barry: *Economic Analysis before Adam Smith*. London: Barnes & Noble 1975. 村井明彦訳『古代・中世経済学史』晃洋書房、2018年。
- Jamieson, G.: *Chinese Family and Commercial Law*. Shanghai: Kelly and Walsh 1921.
- Keynes, John Maynard: *The General Theory of Employment, Interest and Money*. London: Macmillan 1967 [1936]. 塩野谷祐一訳『雇用・利子および貨幣の一般理論』（=『ケインズ全集』第7巻）、東洋経済新報社、1983年。
- Klock, Kaspar: *Tractatus juridico-politico-polemico-historicus De Aerario, ... . Mit einer Einleitung hg. v. Bertram Schefold [pp. V\*-CXIII\* vorn im ersten Teilband]*. Hildesheim 2009. Reprint der Originalausgabe von 1651 in 2 Teilbänden. *Historia Scientiarum* (Wirtschaftswissenschaften). Ein Editionsprogramm der Fritz Thyssen Stiftung zur Geschichte der Wissenschaften in Deutschland.
- Krauth, Wolf-Hagen: *Wirtschaftsstruktur und Semantik. Wissenschaftliche Studien zum wirtschaftlichen Denken in Deutschland zwischen dem 13. und 17. Jahrhundert*. Berlin: Duncker & Humblot 1984.
- Leibniz, Gottfried Wilhelm: *Hauptschriften zur Versicherungs- und Finanzmathematik*, hrsg. von Eberhard Knobloch und J.-Matthias Graf von der Schulenburg. Berlin: Akademie Verlag 2000.

- Lessius, Leonardus: *De iustitia e iure caeterisque virtutibus cardinalibus libri IV*. Faksimile der Ausgabe 1605. Klassiker der Nationalökonomie. Mit einem  
Kommentarband hrsg. v. Bertram Schefold. Düsseldorf: Wirtschaft und Finanzen 1999.
- Marx, Karl: *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie*. Erster Band. Berlin: Dietz 1969 [1867]. マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論』第 1 巻、第 1・第 2 分冊、大月書店、1968 年。
- Mokyr, Joel: *A Culture of Growth. The Origins of Modern Economy*. Princeton: University Press 2017.
- Nuccio, Oscar: *La storia del pensiero economico italiano, come storia della genesi dello spirito capitalistico*. Roma: Luiss University Press 2008.
- Olivi, Pietro di Giovanni: *Usure, compere e vendite. La scienza economica del XII secolo*, a cura di Amleto Spicciiani, Paolo Vian e Giancarlo Andenna. Milano: Europia 1990.
- Olivi, Pierre de Jean: *Traité des contrats*, édition de Sylvain Piron. Paris: Les belles lettres 2012.
- Perrotta, Cosimo: *Consumption as an Investment: I. The fear of goods from Hesiod to Adam Smith*. London: Routledge 2004.
- Plumpe, Werner: *Ökonomisches Denken und wirtschaftliche Entwicklung. Zum Zusammenhang von Wirtschaftsgeschichte und historischer Semantik der Ökonomie*. In: *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte* 2009/I, S. 27-52.
- Poettinger, Monika; Schefold, Bertram: *Il pensiero economico nel tardo Medioevo ed all'inizio dell'Età moderna*. In: *Edizione per la mostra I Medici - Uomini, potere e passione*, a cura di Alfried Wiczorek, Gaëlle Rosendahl e Donatella Lippi, Curt-Engelhorn-Stiftung für die Reiss-Engelhorn-Museen Mannheim und Verlag Schnell + Steiner Regensburg 2013, pp. 65-77.
- Poni, Carlo: *The Worlds of Work. Formal Knowledge and Practical Abilities in Diderot's Encyclopédie*. In: *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte* 2009/I, S. 135-150.
- Reich, Jens: *Seignorage. On the Revenue from the Creation of Money*. Heidelberg: Springer 2017.
- Reinhard, Wolfgang: *Staatsmacht und Staatskredit. Kulturelle Tradition und politische Moderne*. Heidelberg: Winter 2017.
- Rieter, Heinz: *Die gegenwärtige Inflationstheorie und ihre Ansätze im Werk von Thomas Tooke*. Berlin: de Gruyter 1971.

- Schefold, Bertram: Amintore Fanfani e le tesi di Max Weber. In: Amintore Fanfani: formazione culturale, identità e responsabilità politica, a cura di Alberto Cova e Claudio Besana, *Bollettino dell' archivio per la storia del movimento sociale cattolico in Italia*, n. 1-2, Milano: Vita e Pensiero / Pubblicazioni dell'Università Cattolica del Sacro Cuore, 2011, pp. 111-123.
- Schefold, Bertram: *Wirtschaftsstile Teil 2: Studien zur ökonomischen Theorie und der Zukunft der Technik*. Reprint der 1. Auflage von 1995. Frankfurt am Main: Fischer 2014 (238 pp.).
- Schefold, Bertram: *Wirtschaftsstile Teil 1: Studien zum Verhältnis von Ökonomie und Kultur*. Reprint der 1. Auflage von 1994. Frankfurt am Main: Fischer 2015 (260 pp.).
- Schefold, Bertram: *Great Economic Thinkers from Antiquity to the Historical School. Translations from the Series Klassiker der Nationalökonomie*. Routledge Studies in the History of Economics 178. London, New York: Routledge 2016c.
- Schefold, Bertram: Goethe's economics: between cameralism and liberalism. In: Philipp R. Roessner (ed.), *Economic Growth and the Origins of Modern Political Economy*. London: Routledge 2016d, pp. 79-100.
- Schefold, Bertram: *Great Economic Thinkers from the Classics to the Moderns. Translations from the Series Klassiker der Nationalökonomie*. Routledge Studies in the History of Economics 190. London, New York: Routledge 2017.
- Schefold, Bertram: Thomas von Aquin, Petrus Johannes Olivi und Antoninus von Florenz. Mittelalterliche Kapitalkritik und die Weberthese. In: *Historisches Jahrbuch* 138, 2018, pp. 92-118.
- Seppel, Marten; Tribe, Keith (eds.): *Cameralism in Practice. State Administration and Economy in Early Modern Europe*, Woodbridge: The Boydell Press 2017.
- Sieferle, Rolf Peter: *Der unterirdische Wald. Energiekrise und industrielle Revolution. Die Sozialverträglichkeit von Energiesystemen*, hrsg. v. Klaus Michael Meyer-Abich, Bertram Schefold und Carl Friedrich von Weizsäcker, Bd. 2. München: Beck 1982.
- Todeschini, Giacomo: *Ricchezza francescana. Della povertà volontaria alla società di mercato*. Bologna: Il Mulino 2004.
- Wolff, Michael: Mehrwert und Impetus bei Petrus Johannes Olivi. In: *Sozialer Wandel im Mittelalter*, hrsg. v. Jürgen Miethke und Klaus Schreiner. Sigmaringen: Thorbecke 1994, pp. 413-423.